「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	**岡山大学**
取組学部・研究科等名	全学［学部：文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、環境理工学部、農学部、マッチングプログラムコース、 大学院：教育学研究科、社会文化科学研究科、自然科学研究科、保健学研究科、環境学研究科、医歯薬学総合研究科］
構想名称	東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム

海外の相手大学	【中国】	吉林大学（全学）
	【韓国】	成均館大学校（文科大学、サムソン病院、薬学大学、自然科学大学化学科、ナノ構造物理統合研究センター）

平成２６年１月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

「キャンパス・アジア」モニタリング報告書について

「キャンパス・アジア」のモニタリングは、日中韓質保証機関協議会*1が実施するプロジェクトで、「キャンパス・アジア」パイロットプログラム*2をケース・スタディとして取り上げ、プログラムの優良事例を抽出しながら、国際的に連携した教育を展開するうえで「保証すべき質」についてより明確にし、３か国間で共通の質保証機関のガイドラインを作成することを目指しています。

モニタリングでは、プログラムの最低限の質を確認するような評価ではなく、国際的に連携したプログラムの現状や質向上にかかる活動を把握・確認し、**教育の質の観点から優良事例を抽出して、それらを国内外に広く発信していくことを目的**としています。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムは、2011 年に開始され、５年間のプログラムとして採択されています。その間において、日中韓質保証機関協議会は、モニタリングを２回実施することとしています。１回目のモニタリングは、日中韓各国における関連法規や評価制度・手法を踏まえて、各国が個別に実施することとしました。

パイロットプログラムの取組みは今年度で３年目を迎え、交流の動きも本格化しています。１回目のモニタリングでは、機構の「キャンパス・アジア」モニタリング委員会が定めたモニタリングの基準に基づき、各**プログラム実施主体が平成 24 年度末までの取組みについて自己分析を行いました。この自己分析書に対して書面調査**を行うとともに、**訪問調査を通じて今年度（平成 25 年度）までの取組状況を聴取**しました。

本報告書は、そのモニタリング結果をまとめたものです。なお、**優れた取組みの抽出**にあたっては、当該大学の自己分析書の文章をもとにし、説明に際して最低限必要な修正を加えました。

さらに、プログラムの今後一層の進展に資するため、**大学から今後の課題点を記載していただき、それに対するモニタリング実施側からのコメントを付記**して、本報告書に掲載しました。なお、このコメントは、モニタリング委員・専門委員の立場からのもので、モニタリング委員会全体の意見を代表するものではありません。

※本報告書の形式について
基準１から４の各基準毎に、「取組みの特徴」の後に、「抽出した優れた取組み」を枠内（　　）に示し、その理由を付しています。

なお、本報告書の電子版およびモニタリングの基準やプロセスをまとめた「『キャンパス・アジア』モニタリングハンドブック」の電子版は、大学評価・学位授与機構ウェブサイト（http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/jckcouncil/campusasia_monitoring.html）をご覧ください。

＊１： 大学評価・学位授与機構、中国教育部高等教育教学評価センター（ＨＥＥＣ）、韓国大学教育協議会（ＫＣＵＥ）の３つの質保証機関から構成。

＊２： 平成 23 年度大学の世界展開力強化事業タイプＡ－Ｉ：日中韓のトライアングル交流事業として採択された 10 のプログラム

＜目　次＞

Ⅰ　モニタリング結果の概要･･･ １

Ⅱ　基準ごとのモニタリング結果

基準１　教育プログラムの目的･･･ ２

基準２　教育の実施

基準２－１　実施体制･･･ ４

基準２－２　教育内容・方法･･･ ６

基準２－３　学習・生活支援･･･ ８

基準２－４　単位互換・成績評価･････････････････････････････････ １１

基準３　学習成果･･･ １３

基準４　内部質保証システム･･･ １４

＜付録＞

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

Ⅰ　モニタリング結果の概要

総　　括

本プログラムは、３か国の間で協力して課題を克服できる次世代の中核人材育成を目的とするものであり、教育内容・方法については、全学を挙げ、文理を越えて各分野で本プログラムにかかる教育が行われている。特に日中韓の学生がアクティブ・ラーニングを重視したプログラムの中で「共通善」について学び、相互理解を深めるという試みが行われていることは進展した取組みである。

学生の学習・生活支援については、事前の語学研修や個別指導が行われ、学生の自主的な交流の場である「CA クラブ」（キャンパス・アジアクラブ）も形成され、進展している。

学習成果については、今後、「共通善」をよりいっそう明確に定義し、参加した学生の学習成果を測定することに課題が残っている。

内部質保証システムについても、本プログラムにおける「質」の定義を明確にして定期的検証を進めることや、課題について各学部をまたがって検討する体制を構築することに課題が残っている。

優れた取組み

- 「共通善」をどのように認識するかという議論の成果は、日中韓の共通教科書にまとめられ、この教科書に基づいて各国で共通の共同教育プログラムが組まれることになる。平成 24 年度には、「共通善」教科書の第１章となるプロローグ（４か国語）の編纂を済ませた。
- 日中韓共同学習では、「学生フォーラム」として、日中韓の長期留学プログラム参加学生による「日中韓の相互理解」をテーマとする学生カンファレンス（個別発表、ディスカッション、グループ発表）を、学習の総括という位置づけで行っている。

Ⅱ　基準ごとのモニタリング結果

基準１　教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

教育プログラムの目的について、参加大学間で緊密な理解のすり合わせを行い、教材の共同開発を行い、目的が共有されている点は優れている。「共通善」のシンポジウムの開催などの取り組みがなされていることも優れている。日本側大学と相手大学では学部構成等が異なるため、その共有や調整について継続した取り組みが期待される。また、「共通善の実現」のための共通カリキュラムの構築は、モニタリング実施時点では教科書の第１章が完成した段階であり、今後の更なる進展が期待される。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

人文・社会科学系においても自然・医歯薬系においても、東アジアにおける相互理解と共通課題に取り組む基礎を作るために、共同教育が重要であるという認識に立ってプログラムを遂行してきた。その際、相互理解や共通課題への協力をどのように構築するかが大きなテーマで、具体的には吉林大学及び成均館大学校との共同教育のベースである「共通善」をそれぞれがどのように認識するかということから議論を開始した。具体的には、３校の代表を中心とした共通善教育研究会を通じて意見交換を重ねてきた。研究会は、平成 24 年 5 月・8 月・12 月に実施され、また平成 24 年 11 月 3 日、4 日には共通善研究フォーラム、平成 25 年 3 月 5 日、6 日には共通善研究国際シンポジウムが開催され、研究成果が報告された（『共通善教育研究国際シンポジウム報告集』、『共通善研究国際フォーラム　研究報告集Ⅰ、Ⅱ』、他）。

（優れている理由）

専門分野の如何を問わず、東アジアにおける相互理解が重要であるという人材育成についての基本的認識が３大学間で共有されている。参加大学間で議論を行い、時間をかけて目的を共有しようと努力しているのは優れた取り組みであると考える。

こうした議論の成果は、日中韓の共通教科書にまとめられる。これは、共通の歴史認識や価値観を纏めるというものではなく、お互いの価値観の相違や異なる主張の根拠を相互に理解することにより、相互の信頼感を醸成していこうという試みである。この教科書に基づいて各国で共通の共同教育プログラムが組まれることになるが、講義の中身は必ずしも同じになるという訳ではない。平成 24 年度には、「共通善」教科書の第１章となるプロローグ（４カ国語）の編纂を済ませた。

（優れている理由）

プログラムの基礎となる考え方や育成する人材像について、日中韓の共通の教科書として

文書化するという構想は、プログラムにおける教育の共同性を担保する取り組みとしてきわめて有意義である。既に３大学間で協議し、方針に合意できたことは大変意義がある。今後、吉林大学や成均館大学校の教員も関与した教科書の章が編纂されていくことを期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

- 参加大学間での協議が十分に行われており、共同教育の目的や育成する人材について、共通に理解が図られていることは優れている。
- 教科書の作成は優れた取り組みであるが、それが人文・社会科学系と自然・医歯薬系をつなぎ、なおかつ東アジアにおける相互理解と共通課題に取り組む基礎となることを目指すのであれば、「共通善」の内容がより明確になっている必要があるだろう。
- プログラムの目的が、具体的なコンピテンスの形で表現されれば、プログラム運営における参加大学間の相互理解が深まるだけでなく、一個の課程としての凝集性がさらに高まるのではないか。
- 教材の共同開発に続いて、その教材の授業での使用について参加大学間での協議・調整が今後展開することが期待される。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

〇大学が指摘した課題

平成２５年５月末をめどに、共通善教育研究会の東アジア伝統的思想部会、歴史部会、現代の課題部会の３分野から教科書の下敷きとなる原稿を提出してもらう予定だが、これらの原稿をどのように検討して教科書に仕上げるかが最後の課題として残っている。つまり、執筆者の氏名を残し内容については個人の責任に帰するようにするか、研究会、またはキャンパス・アジアとして責任を持って編纂していくかの詰めがまだ行われていない。

〇コメント

- 個人の責任に帰すか団体とするかというのも、たしかに重要な点だが、各大学における伝統・歴史・現代の統一した記述も容易ではないと思われ、さらに日中韓での統一した記述はさらに困難が容易に想定される。評者は、かつて日中韓越の統一教科書の作成を、英語教材ないし東洋古典思想教材で試みた経験を持つが、東洋古典だけでも容易ではない。
- 教材の使用法について、参加大学間での議論を重ねていくなかで、２つの選択肢のうち、より適当なものに議論が収斂するのではないかと考える。
- 「研究会」は、当該プログラム実施にあたり立ち上げられたと理解しているが、共同教育の基礎となる資料として教科書を作成するのであれば、研究論文集ではなく、３大学間で協議の上、内容を確定することが好ましいと考える。
- 学問的見解の相違、歴史認識の相違をどのように克服できるか、原稿を誰がどのような権限で加筆修正できるか、など特に日中韓３か国の間の試みであることから、注目されるに違いなく、事例としてぜひ残していただけると他の大学への参考になると思われる。

基準２　教育の実施
基準２－１　実施体制 目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

岡山大学では本プログラム実施に向けて専任教員などの人員を配置し、実施体制が基本的に整備されていることは優れている。３大学の合同会議が開催され、プログラムの運営等について協議する体制が整備されている。今後、各大学内の学部長や副学長など最高レベルの協議体制との関係をより明確化することや、共通学務委員会の設置の検討も期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

岡山大学、吉林大学、成均館大学校の間では、毎年３月に合同会議を開催し、プログラムの運営方法や課題等を討議している。ただし、平成２４年度においては、３国間の政治関係が悪化したため、予定していた大規模な合同会議が開けなかった。その代替策として、岡山大学のスタッフが成均館大学を訪問し（吉林大学もこれに合わせて成均館大学を訪問）、小規模な合同会議を行い意見を交換した。

平成２５年度からは、ネットを利用した簡易テレビ会議システム（WebEx）に登録し、日常的にテレビ会議を行える体制を確立した。これは、将来的に WEB 講義にも利用される予定である。

（優れている理由）

定期的に３大学による合同会議を開催し、プログラムの運営等について協議する体制が整備されている。また３大学が日常的な協議・調整の場を設けたことは優れている。今後、日中韓の三国事業として、他国の大学からのより積極的な関与が期待される。

岡山大学では国際センターの枠組みの中でキャンパス・アジア事務局を３名配置しサポート体制に万全を期すとともに、専任教員を３名配置し、日本文化、東アジアの歴史、言語、自然科学・医歯薬分野の講義・教育指導を行っている。また、順次協力講義（既存の講義にキャンパス・アジア講義の冠をかぶせる）も拡大している。吉林大学では、国際交流与合作処の日本担当が特別講義を実施している。成均館大学校では、キャンパス・アジア事務局の専任教員が、キャンパス・アジア科目を展開している。このように、それぞれの大学の教員・事務局の体系は少しずつ異なるものの、各々がキャンパス・アジアプログラムの構築・運営について共通の認識をもち、各大学のシステムに合った方法で共通教育プログラムを実施している。

（優れている理由）

本プログラム実施に向けて、岡山大学では十分な人員を配置している点は有意義である。既存の講義にキャンパス・アジア講義の冠をかぶせる協力講義が順次拡大されており、学内

の協力体制の強化が進められている。各参加大学において、共通認識の上に立った実施体制が整備されている。

モニタリング実施側からのコメント

・　中国では学長や学院長（あるいは党書記）を巻き込むことが、事業の推進には欠かせないと考えられるが、吉林大学が国際処レベルの対応とすれば、その保証が十分と言えるか、不安が残る。より高いレベルの大学関係者をプログラムに巻き込む工夫が必要と思われる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムでは、全学体制で学生の派遣、受け入れを行っており、さらに学部、大学院博士前期課程、大学院博士後期課程の学生を受け入れている。加えて、英語のみでの留学も受け入れている。しかしながら、キャンパス・アジアの留学生はいずれも身分は特別聴講学生であり部局の正規学生でないため授業が聴講できても単位履修ができないなどのケースが多く発生している。そこで、全学で提供する科目を増やす、キャンパス・アジア共通科目を増やす、学生・院生を部局に帰属させる、などの対策を検討する必要がある。

大学間のコミュニケーションや交流に関して、実際に相互に行き来をすることによって得られる効果は計り知れないが、今後はインターネット上の相互交流プログラムをより活用していくことを考えなくてはならない。

○コメント

・　３大学の合同会議が、大学のどのレベルによって開かれているのかが見えにくい。教員レベルの研究会的なものであるならば、大学の指導部を巻き込み、システム設計を保証する方向性が模索されるべきと考える。
・　共通善の実現に向けたプログラムという本事業独自の部分がどこにあるかを明確にし、それを単位修得に結び付けるよう願いたい。
・　キャンパス・アジア留学生の岡山大学での履修にかかる課題については、キャンパス・アジア関連の科目を全学横断的に「キャンパス・アジア共通科目」として位置づけ、単位を取得できるように解決した旨、訪問調査において確認した。

基準２－２　教育内容・方法
目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

全学を挙げ、文理を越えて各分野で本プログラムにかかる教育が精力的に行われている。特にアクティブ・ラーニングを通じて日中韓の学生が共同で「共通善」について学び、相互理解を深めるという試みは優れている。今後、自然科学分野を含め、共通善をより具体的な教育内容・方法へと共同で検討・実施していくことを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

キャンパス・アジア共通科目、リージョナル・カンファレンス、セミナー、ワークショップ、サマースクールといった、学生のグループワークや体験学習等のアクティブ・ラーニングを重視した多様なプログラムの中で、受入の中・韓学生および日本人の学生に対して、①伝統的な日本文化、地域社会の現代的課題を体験的に学ぶ、②共通善について学ぶ、③課題や価値観の中に共通性を見出す、ことなどをテーマとして教育を行っている。

（優れている理由）

日中韓の学生が共同で「共通性」や「共通善」について学ぶ、意見交換を行い相互理解を深めるという試みは日中韓の関係構築においてもきわめて示唆的である。アクティブ・ラーニングを通じた実践知に育成の目標を定め実行していることは優れている。

「シェアハウス」という新たな取組は、実生活を通じて日中韓の文化理解を促進し、コミュニケーションの方法を学ぶという教育プログラムである。シェアハウスのプログラムは、社会（地域コミュニティ）の一員としての在り方を日中韓の学生が学ぶ機会にもなっている。

（優れている理由）

平成 25 年４月よりシェアハウスを始め、一軒家２棟を借りそれぞれに日中韓の学生１名ずつ入居する方法をとっており、教室以外での相互理解を促進する配慮が行われている点で優れている。１棟の学生数が少ないために交流が少なくなりがちな傾向もあり、今後、更なる工夫を期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

- 教育内容や教育方法を共同で検討し、実施する相手として、中国の大学の国際処を通して連絡を取ることは第一歩として理解できるが、相手大学の実際に教育を担う学院と連携するシステムを構築することが肝要と思われる。
- それぞれの取り組みにおける個別分野同士の関連についてもいっそう深めてもらいたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

〇大学が指摘した課題

次のステップとして、日中韓の共通の教科書によるキャンパス・アジア科目教育を実現する必要がある。中国あるいは韓国どちらかの交流プログラムに参加した学生が、参加後更にもう一方の国との交流プログラムに参加するための仕組みを考える必要がある。つまり、「3 国間」相互交流になるための、交流プログラムを深化させる必要がある。

〇コメント

- 交流プログラムを深化させるには、まず３大学で協定を結ぶことが必要である。教員の交流があっても、単位互換には協定が不可欠であり、急ぐ必要があろう。
- 教科書を共同して作成する相手として、具体的な教育に実際に携わる組織が必要ではなかろうか。
- 共通の教科書の作成は、教育の共同性を保証する取り組みとして有意義である。その教科書の使用法を含め、今後、参加大学間での協議が進展することが期待される。
- 教育プログラムの組成にもよるが、たとえば修士の場合、３か国での修学を体験するのは２年間にはやや負担過重となるのではないかと危惧される。そのあたりの配慮を進めつつ、深化の検討をお願いしたい。
- ３つの国の文化を学生が理解できるための仕組みとしての３か国で学ぶ機会を工夫することについては大いに期待したい。弾力的な仕組みが構築できればいいのではないか。
- 学生の物理的な移動（留学）はもちろん重要であるが、３か国の学生が共に学習する機会が常に用意されることも共同プログラムの利点ではないかと考える。大学ではすでに取組みを始められているところであるが、これにより、留学しない一般学生にも共同プログラムの恩恵を受けることも可能になるのではないか。

基準２－３　学習・生活支援
学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

学生の学習・生活への支援体制は基本的に整備されており、事前の語学研修や個別指導が定期的に行われている。特に学生主導のカンファレンスや「CA クラブ」などで、学生を主体的に関与させているのは優れている。リスク管理のための保険の整備をオーダーメイドで行っていることは優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

明確なシラバスを作成して授業開講、履修指導を行っている。また、チューターの配置、オリエンテーションの実施、諸手続の支援等の各種の学習支援を実施している。派遣前の学生に対しては、事前の語学研修やチューターの活用による追加指導を実施している。本プログラムにおいては、自大学から派遣する学生に対して事前の語学補習（英語・中国語・韓国語）を平成 24 年 12 月から平成 25 年 2 月まで定期的に実施した。また、チューターを活用し 1 対 1 での自主学習の強化を図っている。

（優れている理由）

受入れ学生に対する適切な学習支援、生活支援が行われているのは優れている。派遣学生に対し、事前の語学研修や個別指導が定期的に行われており、事前学習は派遣の効果を高めるうえできわめて効果的であることから、有意義な取り組みである。また、帰国してからも語学を使う場として、大学の語学カフェ（L カフェ）が整備されている。

日中韓共同学習では、「学生フォーラム」として、日中韓の長期留学プログラム参加学生による「日中韓の相互理解」をテーマとする学生カンファレンス（個別発表、ディスカッション、グループ発表）を、学習の総括という位置づけで行っている。本テーマに関する個々の問題意識の向上が明確に読み取れる成果を、『カンファレンス文集』にまとめている。

（優れている理由）

日中韓の共通性の理解が狙いの一つであることに鑑みれば、学生フォーラムは学びの形態として有意義なものであるといえる。また学習の成果も確認しながらの指導である点も優れている。学生の自主的なネットワーキングをプログラムとして促したことは、将来の人脈形成に向けてきわめて有意義である。

日中韓学生のワークショップを開催したが、このことがワークショップの参加者による自発的な「CA クラブ」の形成を促した。「CA クラブ」が、日中韓の交流活動、自主的な相互学習の場となりつつある。

（優れている理由）

CA クラブは、キャンパス・アジアプログラムについて学生主体で考える組織として、平成25年４月に学生の自発により発足した。共同教育の成果として、このような学生の自発的な交流・学習の場が形成されたことは、重要である。

キャンパス・アジアプログラム学生に対し、奨学金等の財政的支援や宿舎等の情報を事前に提供するとともに、ほとんどの参加学生にこれらの生活支援を提供している。当該目的の策定にあたっては、吉林大学及び成均館大学校との間で相互に授業料免除、奨学金支給が行われている。受け入れ学生に対しては、到着時のオリエンテーション、専任教員により定期的な個人指導（カウンセリング）を実施している。

（優れている理由）

参加学生に対する生活支援が明確になっており、事前に情報提供が行われているのは優れている。

本校から派遣する学生に対しては、事前に派遣先での生活支援の状況を適切に伝達するとともに、Skype または Facetime によるカウンセリング、災害時等のリスク管理の生活支援をおこなっている。また、岡山大学では派遣する学生が加入する保険を、保険会社と協力してオーダーメイドで用意している。リスク管理を含めた保険にしており、事故が起こった時の最初の連絡からサポートまで、保険会社で行うように整備してある。

（優れている理由）

派遣先での生活支援の状況を把握の上、学生に情報提供していることに加え、カウンセリングも提供していることは優れた取組みである。日中韓の政治的関係を考慮すれば、リスク管理について強調していることは大切なことである。特に、オーダーメイドの保険契約を結んでいることは優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

真の「成果」とは何かについて、また、その測り方についても、初年度が終わった段階で、改めて問わなくてはならない。その意味では、留学体験学生が「多くを学び」「満足した」ということ以上に、どのような進路を得て、その進路の中でキャンパス・アジア留学での学びがどう将来の人材育成につながっていくのかを長期的展望にたってとらえ直し、学習支援のあり方

を改善する必要がある。
いわゆる「アームチェア留学」（至れり尽くせりの留学）では、自ら困難を切り開くバイタリティを持った学生は育たないが（学生が何かあるとすぐに事務局に頼ってくる）、一方で手をかけただけ学生が育つという側面もあるので、これまでの成果と問題点をそうした視点から整理する必要がある。

〇コメント

- この点で、「共通善」やその他の本プログラムの教育目標を具体的な学習成果に移し替え、そのうえで本プログラムとしての達成度を検討することが適当ではないかと考える。
- 日中韓大学間交流が学生の人生にどのようなインパクトを及ぼすかは興味深い視点であるが、そもそも東アジアの共通性を理解し、相互理解を深めた学生の育成が狙いであるので、それが社会に出てからどのようなメリットに結びつくか、といった人材育成論に短絡しなくてもいいのではないだろうか。相互理解への意欲を育てれば成功かもしれない。
- 学生に対して最低限必要な学習面・生活面でのケアを提供することは、プログラムとして当然のことであるが、そのうえで学生の自主性を尊重すべきではないかと考える。
- 学生が直面する問題は、きわめて具体的なものであり、具体的な問題はそのつど、速やかに、受入ないし派遣した大学によって、責任をもって具体的に解決されなければならない。そのために教職員の体制が整備されていることは重要であり、どのような体制が取られているのかが明示されている必要がある。

基準２－４　単位互換・成績評価
単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

キャンパス・アジア関係の科目を一般教養教育科目とは別にキャンパス・アジア共通科目として全学的に認定してもらい開講するという努力を行い、受入学生も単位を取得し認定されることが可能になっている。今後、日本側の大学内での学部・研究科での単位認定取り扱いの協議、ならびに、成績評価や単位認定のための基準設定に関する参加大学間の協議・調整が望まれる。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

キャンパス・アジア共通科目を開講し、受入学生に対して単位認定を行っている。これは、キャンパス・アジアが独自に開講する科目、および既存科目でキャンパス・アジアの冠をかぶせた科目（部局が開講する科目であってもキャンパス・アジアとして単位認定が可能）である。

（優れている理由）

学部と大学院の垣根を超えて大学全体として認めてもらえるよう、教養科目としてではなく、キャンパス・アジア共通科目として出せるよう、キャンパス・アジアの冠をかぶせて学生が単位を取得できるように工夫したのは優れた取組みである。

キャンパス・アジアは、学長のサインと捺印がある修了証書を独自に発行している。また、吉林大学、成均館大学校も同様の修了証書を発行している。

（優れている理由）

留学期間が半年～１年の学生に修了証書を発行し、サマースクールの学生にはサマースクールの修了証書を出している。修了証書はしばしば行われる有効な取り組みであり、実際に学生へのインタビューにおいても、就職活動等の場面で修了証がキャンパス・アジアプログラムの経験やそこでの学習面での付加価値を示すための証明として役立っていることが明らかになった。

モニタリング実施側からのコメント

- 部局・分野等で成績評価、単位認定のための基準が異なる事態を改善し、一個の教育プログラムとしての統一的な基準の設定が望まれる。
- 全学体制での大学間交流であるので、専門分野と交換留学をどのように位置づけるか、丁寧に議論してもらいたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

全学で単位互換を行っているという特徴がある一方、部局ごとに履修要件、単位認定基準が様々であり、それぞれの部局の特殊性を考慮すると、単位認定制度を統一するのは事実上不可能である。しかしながら、岡山大学に留学してきたキャンパス・アジアの学生は、単位履修が複雑で制限されることに大きな不満を持っている。この点を、２つの方向で改善していきたい：

１．キャンパス・アジアの学生は、基本的に特別聴講学生なので、特別聴講学生向けの授業を全学、またはキャンパス・アジア独自でできるだけ多く提供する。

２．留学生受け入れを前提とした特定のプログラム（コース）を準備し、そこで集中的に留学生を受け入れる。

また、共同大学院をどのように構築していくか具体的に検討を始めたところであるが、授業の相互乗り入れ、一部のプログラムを協定校で履修、相手大学にユニットごと移すハイブリッド型、編入型など、様々な可能性を模索している。基本的には、文部科学省が指針として示している国内大学間のみにおける共同大学院設置ガイドラインを参考に国際共同大学院の設置を構想している。

○コメント

- 文系と理系では統一の認定基準を作成するのは、たしかに難しいであろう。キャンパス・アジアの学生向け授業の開講は、たしかにひとつの解決策だが、それが特定の教員の過重な労働を招くようでは、システムとして有効とはいえない。キャンパス・アジア専用の授業が、各学部にも役立つような新しい共通科目とするとか、そのための人員の手当てが保証されるなど、本プログラムの資金が有効に活用されるとよいのではなかろうか。
- 構想が比較的大括りであるため、詳細の人材育成目標を明確化しそれを単位に結び付けることは非常に困難を伴うであろうことは予想できる。しかし、少なくとも共通化できる講義や共同での活動などを単位化出来なければ、参加者も増加しづらいであろうため、努力を望みたい。

基準３　学習成果
教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

今後、「共通善」をよりいっそう明確に定義し、それに即した統一的な学習を実現するカリキュラムを構築することを推進した上で、参加した学生の学習成果をいかに測るのかを検討していただきたい。具体的には、たとえば、語学力ではプログラム参加要件の語学資格試験等による検証、各科目では３大学による評価基準の標準化の取り組み、目指す人材像への到達度については学生の満足度・成長実感と共に、「アジアにおける共通善」に関するレポートや論文、プレゼンテーションなどによる３大学共通の評価の仕組みの導入検討を願いたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築に課題が残っていると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

- とりわけ本プログラムの目標である「共通善」にかかる学習、大学院生の論文執筆などについて、学習成果を具体的に測定する方式の検討を期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

質保証を確保する上で、学習成果の測定方法と結果の分析は重要な課題であり、早急に検討する必要がある。

○コメント

- 「共通善」との関連で、プログラムに参加した学生の学習成果をどう測定するのか、それには学習目的とそれを実現する方法の明確化が前提となろう。測定方法はすでに既存のものがそれなりに数があるのだから、測定対象の明確化がなされれば、おのずと測定方法も決まるのではないだろうか。
- 本プログラムの教育目標たる「共通善」ならびに、プログラム中の各科目について、学習成果を軸にした成績評価の方式を検討されるよう期待したい。
- 何を評価したいか、評価すべきかについて一層の議論をすべきではないか。
- 国際的な共同プログラムとして設定した目的に照らして評価する仕組みを構築していただきたい。

基準４　内部質保証システム
内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

学生からの意見聴取や外部レビューを行い、そこで指摘された問題について検討し、改善の取組みを行っている。今後、「アジアのリーダー的人材育成」を目的とする本プログラムにおける「質」の定義を明確にし、それに叶うように各大学の「強み」を組み合わせたプログラムとして構築し、その定期的検証を進めていただきたい。また、プロジェクトで明らかとなった各種の課題を学内で検討する組織を、各学部をまたがって用意することが望まれる。以上のことから、質を伴った取組みの構築に課題が残っていると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

- 内部評価や改善のための体制が整備されており、実際に改善に取り組んでいることを評価したい。その意味では、進展している部分も多いと考える。
- 学生からの意見聴取をどう定型的・規則的に行い、かつその結果を教員にどう還元するかの仕組みを検討する必要があるのではないか。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

〇大学が指摘した課題

３校間での質保証制度の議論を進め、客観的評価に耐えうる質保証制度を構築する必要がある。しかしながら、一方で、講義の形式を相互にそろえるのではなく、様々な形態と内容があるので留学の価値が生まれるのだ、多様性と異質性をお互いに認識することが相互理解につながるのだという議論も根強く、当面は単位互換に耐えられる講義時間数の把握、講義における単位認定・評価システムの相互確認から取り組むことが現実的であると考える。

〇コメント

- 日本側の学内の組織として、実務担当教員の組織と、これを大学レベルで決定する最高レベルの組織が必要であろう。とくに学部間の調整が必要な課題も多いところから、学内の体制の整備は急務と思われる。３大学間で議論を進めるのは重要だが、すでに記したように中国の大学の国際処は、対外連絡部門であり、教学の具体的な内容は担当してはいない。教学内容に関わる問題は、国際処を通して、どこか具体的な担当部門を相手大学の中で確定する必要があるのではなかろうか。
- 教育内容における多様性と、成績評価等の手続き面での統一性は容易に両立しうるし、後者が担保されて、初めて参加大学との間で一個の教育プログラムの運営が可能になるのではないか。
- 参加大学との今後の協議・調整にあたっては、単に学習量の把握だけでなく、学習内容の水準面でのすり合わせを期待したい。